

石灰岩地帯に暮らす人々 ——雲南東南部の生態文化複合系の変容過程——

山 田 勇*, 尹 紹 亭**

Life among the Limestone Caves: Environmental Change of the Ecocultural Complex of the Minor Han Group in Southeastern Yunnan

Isamu YAMADA* and YIN Shaoting**

要 旨

中国雲南省東南部の石灰岩地帯に住む漢族の生活を調査した。彼らは約100年前に石灰岩の洞窟に移り住み、コムギ、トウモロコシを主食とし、周辺の森から採集によって生活を行ってきた。しかし、人口の増加と、硝石採集などにより、周辺の森林をはじめとする環境が悪化し始め、土地問題、水問題、人口問題などが、生活を圧迫し始めた。この生態文化複合系の変容過程を、石灰岩地帯の生活の問題に関連させて論じた。

The study is based on the life of the minor Han tribe in the limestone cave in the southeastern Yunnan province of China. Its members settled down nearly hundred years ago and had been earning their life by cultivating corn and wheat together with substantial hunting and gathering in the surrounding forests up until 1950s. But because of the collection of saltpeter and population increase, the surrounding forests decreased and environmental problems relating to water, landuse and high population density created pressure on the harmony of the ecology. The process of environmental degradation, the characteristics of limestone environment and the peoples' attitude towards environmental pressure are described in the paper.

はじめに

昆明から石林へ入るあたりから、南へ下る道すじは、大石灰岩カルスト地形である。しかし弥勒あたりから一旦とぎれ、山は、乾燥した草原植生となり、下方に南盤江（珠江の上流）を見ながら下っていく。

そして再び、平遠街あたりから石灰岩の台地が広がり、文山まで続く。文山までの石灰岩地

* 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

** 雲南民族博物館；Yunnan Museum of the Nationalities, Hai Geng, Kunming 650228, Yunnan, People's Republic of China

帯は、標高1,600mあたりを、緩やかに起伏する高原状の台地であり、砂糖黍が主に植えられ、土の占める割合の方が石灰岩の占める面積よりもはるかに大きい。

文山に入る右手に石灰岩の岩峰が見え出してくる。手前の平遠街の西にも少し岩峰が出ているが、本格的な石灰岩地帯が出てくるのは、文山から東南部分である。

観光で有名な桂林の石灰岩と似た風景が文山を過ぎると次々と現れてくる。そして、この石灰岩の岩峰の占める面積は、岩の割合にして75%という。

我々は、1997年3月にこの文山地区の石灰岩地帯の調査を行った。この地域は雲南の中で最も石灰岩の多い地域でもあり、かつ、土地が狭いため、貧困地帯の多い所でもある。地理的には、すでにベトナムに近く、かつ中国では広西省に隣接していて、主たる住民は壮族である。

この中で、我々が訪ねたのは、東寄りの、廣南と富寧に近い石灰岩地帯と、西畴周辺の一帯である。

ここでは、このうち、廣南地区の調査結果について報告したい。

I 峰岩洞への道

文山地区には、今も洞窟に暮らす人々がいるという話を聞いて以来、この洞窟を訪れることは一つの念願であった。しかし、洞窟で暮らすといっても、かつての何千年か前のような話ではなく、かつ、少数民族でもなく、漢族が住んでいるのである。洞窟に暮らすことから生じる様々な環境的な問題のひとつの特殊なケースとして、森と人の比較研究のポイントとして訪れたわけである。

アプローチは、考えていた程悪くはない。文山から、富寧へ約1日、石灰岩の中のアスファルト道路を走る。どこでも道の工事をされていて、アスファルトに穴があいて極めて走り辛い。富寧へ約50kmの地点に馬街という小さな村がある。我々は、文山、富寧、および馬街で、それぞれ民族委員会の人々からの情報を得て、富寧から再び引き返して、馬街の町を朝、トラクターで出発する。トラクターには初めて乗ったが、悪い農道を実に激しく揺れながら、それでも人の歩くスピードよりは早く、約1時間で、8km先の八宝というイ族の村に着く。ここまでの村は、菜の花、桃、ナシなどの花々に彩られた、数軒の美しい佇まいの落ちついた家々からなっている。安王の村で、持ってきたカップラーメンを作って腹拵えをし、これからは徒歩である。雲南民族博物館が以前8人のメンバーとやってきた時は10kmを2時間半かかったという。我々は一人のポーターを雇って荷物を頼み、歩き出す。

村の入口から、道はすぐ、石灰岩の岩嶺を登る。中国の道はどこでもそうだが、うまく石が階段状に配置してあり、登りやすい。しかし、ここは、石灰岩の岩がそのまま凹凸激しく見え隠れし、その上は何十年も人の通ったあとの証拠として、ツルツルになっている。一気に鞍部

まで登り切ると、そこは、下から細い谷を登ってきた狭い棚畑の突き当たりで、もはや土は少ない。それでも岩の間々にほんの少しの面積の中の土を求めて、人々の手が増えられている。

この初めの鞍部からあとは、次々と石灰岩の岩嶺を上がっては下りという恰好でいくつもの同じような風景を見て歩くことになる。初めの石灰岩の谷底は、水路がひかれているくらい大きな、長さ200m、幅50m くらいの坪である。この底を見下ろすように、中腹に道が取り付けられ、ほぼ並行にしばらく歩いて、次の鞍部を登る。すると次は、もう水路などなく、更に小さな、まるでギリシャの円形劇場のような格好のすり鉢型の坪が見える。下にはコムギが主に植わっており、その西側からせり上がって段々畑があり、やがて、道の少し上くらいから、岩だらけの土地となる。この岩だらけの土地のかなり上に木の生えた山頂部分がある。

鞍部を越える度に、次はどのような風景が出てくるのか楽しみである。鞍部の登りは、それほどきつくなく、適当にしんどくなるところで平地になるように工夫してある。

段々畑に黄色の菜の花が美しく咲き、遠くの崖の上に、数戸の家、その周りに咲く桃の花、遥か下に見える緑の小麦畑、周りに林立する石灰岩の岩峰群、など、この道ゆきは、これまで、様々な所で見えてきた道の中でも最も優れた生態風土的景観である。

やがて、竹が植えられ、その近くにやや大きめの洞窟が見えたりしてくる。家の前を通ると、こちらの人は必ず、茶を飲んでいけとか、メシをくって行かんか、と誘ってくれる。

又、道では、遠くの村から来る農民達と出会う。みな堆肥をかついでいる。トウモロコシを植える前に、畑に入れる準備をしているのである。我々の行く村から1時間以上もかけて来ている人々もいる。牛、馬もやってくる。

3月の初めのこの地方は、はや春うららかな暖かい陽気に満ちみちている。ここの生活のしんどささえ知らなければ、このようにすばらしい環境はまたとないであろう。

最後の坪は、まわりをいくつもの岩峰で囲まれ底部の畑面積も大きく、かつ崖の上に6軒の家が建っていた。そして、その奥に大きな洞窟のドームが見えた。これが、我々の目指してきた峰岩洞である。正式には文山州広南県南屏鎮安王社に属するひとつの村である。殆ど休まず歩いて2時間半くらい、というペースであった。

II 峰岩洞

ちょうど昼休みで、小学校の子供達がバスケット場で遊んでいる。その声が、洞窟に反響してかしましい。入口の手前に、大きなため池が作ってあって、汚い水が底の方にたまっている。昨年電気もついて、テレビのアンテナもある。これらは全て、1992年に雲南民族博物館が調査した後、聞きつけてきた新聞記者やテレビ局が宣伝してくれたお陰らしい。

洞窟の前に立った第一印象は、においと空気の悪さである。それは洞窟の中に入ってみて、

更に強烈になる。洞窟は幅が約125m、高さ50m くらいの半球型が半分に割れたような恰好で、天蓋を覆っている。洞窟の中はかなり深いけれども、人々の住んでいるのは、入口の広い部分で、洞窟は奥から上洞、中洞、下洞に分かれている。洞窟内の面積は約7,500m² (11ムー)、入口の海拔高は1,250m で、洞内の底部は1,130m、つまり、高度差120m の間に人々が住んでいるのである。上洞は、西方向へ向いた洞窟の入口の北の端にあって、光条件は悪いが、最も古い家々が残っている。人口の増加につれて、人々は、中洞から下洞へ移っている。中洞は最も入口に近く、光がよく入って条件は最もよいので、家の数は最も多く、密集していて、4列に並んでいる。中洞から南にいくにつれて、日あたりが悪くなり、家は2、3列になって、下洞へ至り、海拔1,186m 以下に家は無い。下洞の上部に天洞があり、この上の絶壁を登ると上にバスケットコートの2倍くらいの広場があるという。

どの家も屋根が必要ないので、天井裏がむき出しになっている。天上裏にはトウモロコシ、タバコ、豚の干肉、洗濯物など様々なものがおいてあって、実に乱雑この上ない風景となっている。漏斗状の竹の受け口が天井にあって、そこから竹で、家の中へ水がひけるようになっていいる。雨季になると上から石灰岩を伝って落ちてくる水を受ける仕組みである。

家の一階には、豚、馬、牛、鶏がいる。それらの鳴き声と糞の臭いがこの洞内を極めてひどい環境に追いやっている。最近、牛糞棒よけに犬を飼いだした。我々が行くと、犬がけたたましく吠える。階段の上には、豚や鶏の糞尿が散在し、動物小屋の周辺は、今、運び出す堆肥の山である。

長くいると、何か息苦しくなってくる洞窟の頭から押さえつけられるような雰囲気もたまらない。

この洞窟内に人々が住み始めたのは、約百年くらい前といわれる。言い伝えによると狩をしていて鹿を追ってきた先祖の人々が、この洞窟を発見した。当時は、高木と垂れ下がる蔓植物とで入口は外から見えなかったという。周りは深い森に覆われていた。ここをすみかと定めた人々は、まず、入口を覆う高木と蔓植物を切って、光が入るようにした。当初は15軒程の家があるだけで、周りの環境も極めて快適であったが、徐々に人口が増え始め、1992年に56戸、1997年には58戸、280人の人々が住むようになってしまった。その結果というか、その過程において、実に様々な問題がこの峰岩洞を中心に起こることになったのである。これらの問題が峰岩洞ひとつの例にとどまることなく、型や場所が変わって、どこでも起こるような問題のモデルケースのようなところがある。ここでは、特に生態環境の問題に焦点を絞って考えてみよう。

100年前にこの地に住み着いて以来、洞の人々はずっと、ここを根城にして、生活を行ってきた。当初は人口も少なく、周りの環境も森に囲まれて好かった。人々は、この洞を中心に、畑を作り、水田も作り、周りの森では狩猟も行って、ある意味では、理想的な生活を続けてき

た。後に述べるように、様々な困難はあるが、基本的には最低線の生活を守り、維持していくだけのモノと人のバランスが保たれてきた。

しかし、この状況は、余り長く続かない。いくつかの出来事が、周りの環境を含めて、この洞での生活を少しずつ圧迫してきたのである。順を追って、整理してみると、次のようなことになる。

III 土地問題

もともとその洞の土地は、今よりもはるかに広い面積を持ち、南屏や拖董に水田も持っていた。ところが1960年代に入って、政府が土地の調整を行った。そのため、洞の所有する1/3の土地面積部分が安王、水淹塘、石洞、那幕、白泥井、馬鞍山の村々に分割されてしまった。そのために、この村の土地は、水田わずかに5ムーと、洞の前の大きな坪である「黄早坪」の7,000m²（約10ムー）が主なものとして残っただけで、後は殆どが、石灰岩の荒れ地となった。

この周辺の土地の区分をここで少し説明しておこう。一般に、石灰岩の凹地は「塘子地」または「鍋底塘」と呼ばれる。この最も低い部分は、土地が平地で、土はよく肥えていて厚い。

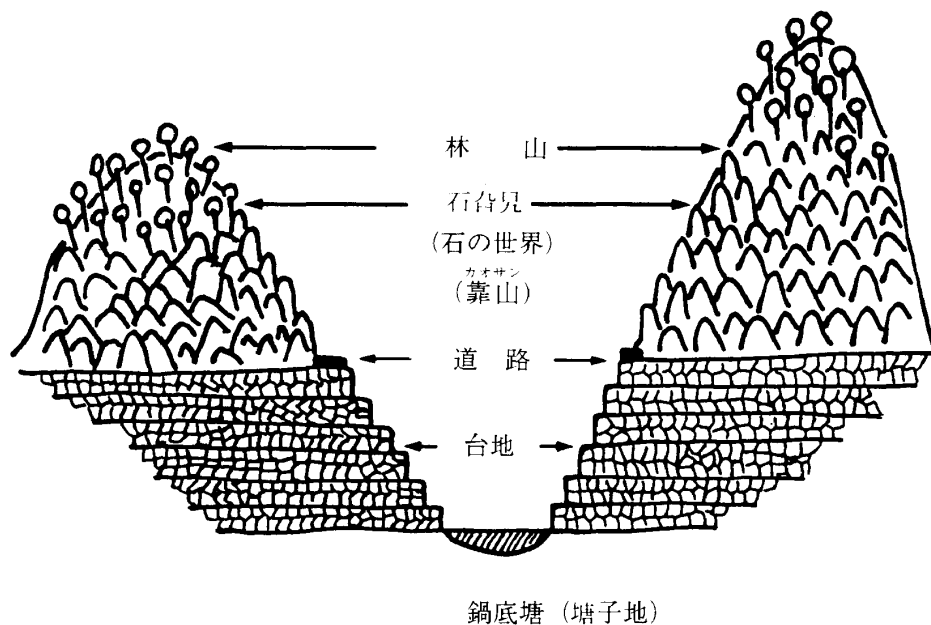


図1 石灰岩地帯の土地の呼称

最もいい土地ではあるが、大雨の時には洪水となる。そのため、昔は、周りに洪水防止の為に、水路が作ってあったが、今は、土地が少なくなったため、この水路にまで作物が植えられてしまった。しかし、幸いなことに、南側の下部10m あまりの所に、やや深い洞窟があり、そこへ水路を通じさせて、排水できるようになっているため、洪水の心配はない。この土地は最もいいので、村民に平等に小さく区分され、1世帯あたり0.1～0.2分（10分＝1ムー）に分けられ、5歩ごとに石が、10歩毎に杭が立てられ、境界は極めてはっきりしている。

塘子地の上の斜面部分のうちでも、それほど石の多くない下部から中部斜面は「台地」とよばれる段々畑になっている。標高は1,109m から1,150m の間にあり、ここは石と土の混じった二等級の土地である。一人当たり2～3分の土地を有している。

その台地の上は、更に石灰岩のカルスト状となり、岩の間に辛うじて土がたまった部分があるという感じである。このようなところは石^ス石^カ石^ラ（石の世界）または靠山（カオサン）と呼ばれる三等地である。ここは、普通なら到底畑に出来るような土地ではないが、この地区の人々の勤勉さが、岩場を畑地化しているのである。ここでは一世帯あたり平均1ムー以上の土地を持っているのであるが、石が多いため、面積でいっても実質上意味がない。従って村の人々は背という単位を用いて、生産量を量る。1背は、30kgで、たとえば、トウモロコシでいうと、二等地の段々畑からは1ムーから17～18背のトウモロコシがとれるが、三等地の岩場畑からは、3～4背しかとれないのである。

1980年代初めに、14歳以上の男女に平等に一人当たり1ムーの土地が分配されたが、石が多いため、それだけではとても生活できず人々は、山の上へ上へと開墾を続けている。その結果、1950年代末には標高1,150m 以下にのみあった農地が、1960年代末には1,200m になり、更に1996年以降は1,300m 以上にまで上がってきて、今は、山の頂上付近にしか森林は見られなくなってしまった。そのことが、より深刻な環境問題を引き起こすことになる。

IV 水の利用

石灰岩地帯では水の問題が最も厳しいことになる。この石灰岩地帯には川も湖も泉もない。頼れるのは雨水だけである。

洞の人々は、雨水以外は井戸に頼るしかない。井戸はしかし、石だらけの所には掘れない。粘土のあるところを探して掘っていく。粘土を掘り、壁を石で固め、更に石の間を粘土で埋めていく。

この洞の最も古い井戸は、「徐」という人が住んでいた土地に最初に作られ、「白善泥」と呼ばれ、洞窟から20分かかる1,290m の地点にある。実際に行ってみると、けっこう山の上にあることが判る。昔は3穴あったらしいが、いまは2穴しか残っていない。大きな直径7m ほど

の四角形で、深さは5 m くらい。横の壁に幅30cm くらいの階段が作られ、女子供でも降りて、下の井戸の底のさらに一部を深く掘り下げたところにたまった水を汲めるようになっている。この階段が出来たのは40年前のことであり、何人もの女性が井戸に落ちて死亡するという事件が起きて作られたものである。小さい方の井戸も40年前に作られている。この井戸は50年代まで、この洞の人々と家畜のための水源であった。しかし、今では人口が増えすぎて、この水は、9月と10月の2カ月しかもたない。

ついで、この井戸の東側の1,300m の地点に新しい井戸が作られた。直径3 m、深さも3～4 m であるが、この水は10日間しかもたない。しかもここへの道は傾斜がきつく、25分かかる。

さらに1958年に「水井湾」という大きな水池が作られた。これは洞から30分かかる東北部にあり、大きな平坦な岩場があって、それが傾いている。ここに低い方に石とセメントで壁を作り、高い方は爆薬で壊して、大きな池を作ったのである。周囲は128m、深いところは2.8m あり、ここが現在の最も大きな水源で、5カ月間人々の水を供給している。すでに述べた二カ所の井戸水が無くなると、この水を汲みに来るのである。この井戸を作る時には、周りの村々からも手伝いに来たため、周辺村の人々も権利を持っていて水を汲みに来る。

以上の井戸では雨の終わる9月から翌年の3月までしか持たない。その後はどうするのか、洞窟内の岩石から滴る水を利用するのである。

洞窟の中の家々の汚らしい屋根の近くに、大型の漏斗のようなものがあり、それが竹を伝って家の中へ入っていくようにしてある。これは、石灰石の岩石から滴り落ちる水を受けて、竹の樋を通して家々の水瓶に水を送る装置である。これは確かによくできた工夫であり、かつ、屋根のない家の雨漏りよけにもなるため、広く家々が利用している。しかし、昨今は、石灰岩の上の木々を取り続けているため、滴下する水の量が減ってきているという話である。

これらの水源以外に、洞内に数十カ所の井戸がある。これらの井戸は、下洞の二つを除いて、全て、上洞に分布している。その中でも、最も多く密集するのは東北の角であり、この辺りは暗く湿度が高い。

これらの井戸は全て個人の所有であり、時には鍵もかけられていて、人々は、松明を持って、水を汲みに行く。大きさや形は地形の条件にあわせて様々であり、小さいので3～4 m³、大きいので10～20m³ の大きさである。これらの井戸は、雨季の前に丁寧に修理して保っている。

これらの様々な水源の中で、最もいい水は、滴下してくる水である。樋を伝って降りてくる水は時には40～50m も流れてくるが、冷たく、清潔で、水瓶に入れておいても何十日も腐ることはない。しかし、洞外から取ってくる水は、すぐに腐ってしまう。

水は無論全て独力で運ばなければならない。朝早くから、天秤棒や、馬の背にポリタンクを

積んで、村人たちは往復1時間以上もかけて、毎日水を運ぶ。一家族を養うのに1日5荷、つまり5回往復しなければならないという。まだ井戸に水のある時期はいいが、2、3月から雨のやってくるまでの2～3カ月間は全く水がない時がある。そういう時には、村から15km離れた「龍樹」や、「董堡郷」にまで水をとりに行かねばならない。こうなると、半日以上の大仕事となってしまう。このような時には、馬等の家畜は、村から水のあるところへつれていって水を与える。

このような悪条件を克服するため、洞窟の入口の前に、政府の援助で大きな貯水池を作った。村民が8,000元出資し、政府からは40トンのセメントと150kgの爆薬と8本の鉄の鎖とコンクリートミキサーを借りた。

池の設計は村長を中心に行い、長さ28m、幅14.8m、深さ3mの貯水池を作ることになった。容量1,060m³の貯水池の周りには、高さ1mの保護壁、外から入ってくる水をうまく貯水池へ流し込む為のコンクリートの斜面、232mの溝等の工事が、1990年の9月に始まり、91年6月に主要部分が完成、92年5月には全部が完成した。これに要した労働力は18,000個（個は一人の大人が一日働いた時の労働力）に達する。

この貯水池では、石を投げ入れたり、放牧したり、洗濯したりすることは禁止され、3人の専門の係員が雨の降る前に、水を受ける斜面と溝の掃除をする。また貯水池の底の砂や石も掃除する。彼らのために、村人が食料を供給する事になっている。

我々が訪れた時、この貯水池の底には、汚いアオミドロ色をした水が少したまっているだけで、村人は誰も利用していなかった。こういった大工事はえてして、失敗に終わりがちになるのは何故だろうか。

いずれにせよ、この洞窟の人々にとって、最も深刻な問題は、水問題である。何とか現状を打開せんと、村民は、パイプラインを引いてもらえるよう政府に陳情に行った。パイプラインと言っても、それ程大袈裟なものでなく、細い水道管のようなものを村まで引くだけのことで、ほんの数十万円の資金があれば出来ることなのである。しかし、現状では、この資金を得ることは、極めて難しいようであり、まだまだ、住民の水運びは続くことになるだろう。

V 森の減少

初めに述べたように、この洞窟に人々が住み始めた当時は、洞の入口さえも判らないくらい木々に覆われていた。畑は、洞の前にある「黄早坪」だけで、それ以外の土地は全て森に覆われ、動物もたくさんいたのである。

しかし、この環境は、外からの影響によって、著しく変化することを余儀なくされる。それは硝石の採取によるものである。1950年代に入って、政府は調査を行い、中国では硝石は雲南

の、しかも文山広南の馬街の峰岩洞にしかないことを知った。それまで、地元の人々は硝石の混じった土で井戸や家の壁を塗ったり、肥料として利用しているだけであった。

1950年に硝石が爆薬の原料となると知った人々は、主として周辺部分10～20kmの範囲から、やってきて、争って硝石をとり始めた。人々は、まず、土の地面から始まり、穴を掘り、地下へ入り、更に天洞にまで登って硝石を含む土を採取していったのである。天洞は絶壁の上にあり、そこへは木や竹を使って登ったのである。

硝石を採る方法は、井戸の近くに直径1.3～1.4mほどの穴を掘り、セメントで穴の内側を固め、穴の底にパイプをつける。そこへ草木灰と篩った土を入れ、水を加えて、かき混ぜる。パイプから出てきた混ざり物を大きな鉄の鍋で煮るのである。一つの穴の土を処理するには膨大な量の草木灰と燃料が必要になる。硝石の値は当時7回煮て9～56元の間で、そのために900kgの水と400kgの土と5,000～11,000kgの葉、草、樹木を消費するという。わずか数十元のために、これだけの資源を投入する作業が、1957年から、1975年まで続いたのである。

硝石を含む土が少なくなり、まわりに草と木もなくなって、硝石生産は終わった。しかし、その後には、荒れ果てた野山が残ったのである。

1980年には、村民に「自留山」が分けられ、それぞれ、自分の山から薪や必要な材を取るようになった。しかし、もうその頃には山に木は少なく、近くの人々に頼んでその周辺の山の薪を取らせてもらっていたが、それも度々というわけにいかない。

そこで、村人が考え出したのは、子供を他の村民の義理の親子関係にするという苦肉の策である。この洞の中には、4人の義理の親を持つ子供もいるという。しかし、こうしても事態はよくならない。何故なら、木の生長はそう簡単に回復せず、時間がかかるからである。この洞の周りの山を見渡すと、来た道筋の村々周辺に比べて、極端に木々の少ないことがよく判る。灌木が頂上付近の極めて傾斜のきつい自留山にのみ残っているだけなのである。

VI 勤勉な人々

石灰岩の岩峰を三つに分けた場合、下の坪の底と、底から続く台地は、それ程問題はない。労力がかかるが、棚状に畑を作っていくのは、どこでもやっていることである。しかし、問題はその上である。この辺りでは、石だらけの荒地を石厓見（石の世界）と呼ぶが、この土地の畑作りは実に大変である。

この辺りの山道は、ほぼこの棚畑と石の世界の間を通じている。従って、歩いていると、目線の先に見えるのは、石灰岩の岩場ばかりのように見える。しかし、よくよく見ると、その間に人が動いたりしていて、ごく僅かの土を耕したりしている。

洞窟の中の強烈な臭いと空気の悪さから逃れて、我々は外へ出て、上に述べた井戸の近く

で、休んでいた。昼から夕方までは、皆忙しく働いて、インタビューをするにも人がいないのである。

正面の30mほど離れた崖の斜面に女が二人、さかんに草を刈っていた。初めは、山の雑草木を刈って、薪にでもしているのかなと思っていた。彼女らは実にせわしげに、勤勉に働く。一人はまだ若く、もう一人は年寄りである。年寄りの方は、膝をかがめて、地に接するようにしてクワを使う。若い方は、膝を曲げず、アフリカ式に鎌を使う。途中から、男が一人、牛をつれてやってきて、やはり同じ所をやり始めた。彼は腰にナタを差していて、ナタで雑草木の根を切っては集めている。牛は、その間、周りに残った緑の葉をせわしく食っている。

初め雑木地と思っていたのが、1時間くらいすると畑であると判ってきた。女二人男一人が2時間近く働いて、ようやく、土の表面がほんの少しずつ見えてきて、それが石灰岩の岩の間に少しずつつながって、狭い段々畑の一部になっていたのである。よく見ると、この一家の畑は、普通の段々畑の上から、鞍部の上まで、石だらけの所に作っており、上と下だけ、石を積んだ段々畑らしくしてある。隣は他の人の自留山であり、緑が見えるが、牛も賢いものでそこへは入らない。

トウモロコシを植える為に、今、段々畑の地拵えをしているのである。こうして雑草木を取り、残ったトウモロコシの茎や根も全て取り、これらは、家へ持って帰って薪にする。そして、このあとに堆肥を入れて、5月になると、トウモロコシを植え、雨を待つという。

どこを見渡しても人が働いている。子供達は、学校が終わると、牛をつれて山へ放牧に出かける。女の子は、小さなポリタンクをもって、底に僅かに残る水を汲みに来る。そして帰りに我々の見ている畑へ寄って何やかやと遊んでいる。女の子は一人でしゃべって、それにときどき、母親か、おばあさんが答える。女の子一人が入ると場が明るくなる。ピンクと赤のトレーナー姿のかわいい子である。

目を遙か先100m以上離れた山の中腹に転ずると、何やら、牛のようなものと人影が見える。牛が一頭、岩棚の上にいる。そして、そこから20mほど離れて、岩の急斜面に女が赤子を背負って一人、そのそばに子供が一人、更にそこから20m離れた所に、夫らしき人が更に急な岩場にとりついている。こちらから見ると、殆ど岩しか見えないが、これもやはり、岩場の間の畑を準備しているのであろう。こういう風景を見ると、やはり感動してしまう。この人はどこの人よりも勤勉だ、と誰もがいう。そうでないと、生き続けられないのである。

夕方、少し早い目に帰っても、まだ戸は閉ざされてだれも帰っていない。7時前くらいになって少しずつ戻ってくる。

我々を迎える為に、鶏を一羽つぶし、歓迎の宴を催してくれた。料理をしているのは、全て男である。我々は暗い電灯の下で、電器コンロの鳥なべをつつき、トウモロコシの酒を飲み、トウモロコシの米を食っていいかげん調子に乗ってきた8時過ぎ、表の戸があいて、妻が帰っ

てきた。背中の竹カゴに溢れんばかりの豚の餌の野菜を背負い、疲れた顔をして、入ってくる。これも迫力のある、心揺さぶられる風景である。

とにかく、ここの人は、男も女もよく働くが、女の方がはるかに労働量が多い。これは東南アジアから東アジア一帯にかけての一つの特徴である。女は早朝5時半頃には起きて、豚の餌を作り、水汲みをし、そして、近くの畑へ出かけていく。10時ころに戻って朝食をとり、今度は遠くの畑へ出かけて、夕方遅く戻って来る。ここの妻の畑はうんと遠い、と夫が酒に酔っている。日曜も休日もない。休むのは春節の時2日だけという。それで疲れないのかと聞くと、慣れているから、と笑う。

このような、まるで石に囲まれたような環境の中でも、人々は、結構多くの作物を植えている。トウモロコシ、ソバ、ソラマメ、エンドウ、白菜、レタス、トマト、トウガラシ、ナス、インゲン、小豆、ショウガ、タバコ、麻、サトウキビ、バショウイモ等である。これらの作物を育て、馬、牛、豚、鶏の世話をするためにも、人々は、懸命に働かなければならない。冬の間、土を耕し、雑草を腐らす。堆肥を運ぶ。2～3月には、タバコ、麻、山芋を植える。3月には、コムギ、ソラマメ、エンドウの収穫。その後、鋤で耕して、除草したあとトウモロコシを植え、同時に、インゲン、小豆、カボチャ、トウガラシ、ナス、白菜、レタスなどを間作する。除草は年2～3回行う。サツマイモは4～5月に植える。

6～8月に麻を収穫し、7～9月にタバコの収穫。8月にトウモロコシとカボチャの収穫があり、忙しい。そして秋にはコムギを播く。10～11月に、サツマイモを収穫し、サトウキビを植える。その間の暇な時に畦の修理などを行う。

動物は、寝室の下に飼っており、平均して赤牛1～2頭、豚5、6～10数頭、鶏が10～20羽、ラバ等もいる。この中で一番環境に影響を及ぼすのは豚である。普通、一家族で一年間に1～3頭くらいの豚を殺し、ラードをとり、塩漬け肉をとっておく。新築、結婚、葬式の時にも豚を殺し、また数頭を売却する。

この豚6頭を飼うために、トウモロコシの茎、葉、サツマイモの葉、蔓、糠以外に、新鮮な飼料が毎日40～50kg必要となる。また飼料を煮るための薪が2日ごとに40～45kg必要である。またこの新鮮な飼料をとりに行くのに往復4～5時間はかかり、飼料を煮るのに2～3時間かかる。

夕方になると、豚の飼料を担いで山のような薪を背負って帰っていく女性が多い。彼女らは、畑仕事を終えた後、豚のために数時間を割いてから戻ってくるのである。

これら以外にも、女達は、子供の世話から家事一切、牛、馬の世話、鶏の餌やりなど、実に多忙であり、殆ど休む暇がない。そして、せっかく育てた豚の値もそれ程高いものでなく、1992年の値は5頭で1,600元である。

村全体に換算すると、豚を飼うためだけで、数百トンもの薪が必要である。しかし、豚は、

どうしても必要であり、とりわけ漢族の人々にとってなくてはならぬ必需品なのである。

ここの生活を見ていると、楽しみというものが殆どない。男は時折、酒を飲んで、集まってしゃべりあうが、女は、殆ど年中、働きっぱなしである。春節の2日だけの休みでも、家の片づけをしたり、編物をしたりしているという。

基本的に彼らは貧しく、現金収入の道は、出稼ぎである。トゥモロコシの収穫が一段落した時点で、彼らは、1～2カ月の単位で、廣南、文山、富寧、硯山、丘北などへ出稼ぎに行く。これらの仕事は、硝石採りが終わった時点で始まり、今では村には30人の石工がいて、うち20人は、なかなかの腕前で、碑文を刻むことも出来る。近頃では、更に遠く馬関、墨江、曲靖などへも行く人も多い。また、年に2～3回出かける人々もいる。こういう人々が主に、洞外に家を建てている。

VII 脱出は可能か

このような環境に住む人々は、どうして洞から出て、外の世界へ行かないのか、という疑問が当然出てくる。

まず、洞窟内に住み続けるいい理由は、次の通りである。まず、夏涼しく、冬暖かい。そして、屋根がいらないから家を造るのに安くつく、仲間が常に近くにいて安心である、というくらいである。これらの理由は、どれもこれも納得がいて、説明の必要もない。

一方、悪い方の要素もいろいろある。人が増えすぎて、空気も悪くなり、息詰まる。牛や馬は外へ出るからいいが、豚や鶏は、日光に当たらないため、歩けないようなものや病気が出てくる。人が多すぎて、ややこしいいざこざも増えた。家族内でも下の兄弟が大きくなって、世帯を持ちたいが、兄がいるため、家も増やせない、など様々な要因がある。そこで思い切って洞外に家を造った人が7人いる。そのうちの二、三の例を見てみよう。洞を出て外で暮らすことが如何に大変かが実感として伝わってくる。

李氏30歳は、7人兄弟の長男で、2人の弟と4人の妹がある。1982年に結婚し、しばらく同居していたが、弟のためを思って外へ出ることを決心し、洞から歩いて10分のところへ家を建てることを決心した。

土地は、半分石、半分土という、このあたりでは普通の、しかし我々の目から見れば、まるで岩山という感じの所である。まず、岩を爆破し、水平な土地にするために、300個の労働力がいった。20km離れた董堡で木材を買うのに1,046元、それを馬と人で運ぶのに250個（1匹のラバが1日に運ぶと2個の労働力相当に換算する）。木材加工に40個、柱、梁などの建築に100個以上、土の壁づくりに440元と230個の労働力、垂木に30個、那幕でレンガを買うのに1,360元、それを運ぶのに184個、レンガをひくのに20個と、合計すると、1万元以上の現金と

1,000個以上の労働力が要ったことになる。1990年に家は完成したが、内装などは殆どなく、枠だけでできたという感じである。ちょっとした内装をするとそれだけで、4～5百元と、100個以上の労働力が要る。

もう一人、36歳の別の李さんの例では、結婚してしばらくは余裕がなく、外へ出られなかったが、ある時決心して、風水師に頼んで土地を見てもらい、1992年2月から始めた。まず、爆薬で岩を爆破するため、45個の爆薬と、400個以上の雷管を買う。固い岩に1mの穴をあける作業が二人がかりで1日1個がやっと、基礎を完成するまでに鋼棒を6本折ってしまった。家を建てる時に数千個の労働力を投入した。

彼は有名な石工で、1974年に学校を出てから、石工の技術を習得し、1979年から出稼ぎに出る。毎年2回ずつ2カ月出て、十数年で貯めた金を家作りのために全部吐き出し、1万7,8千元使い、借金が2,000元残る。家は建ったが、周りは白い石で囲まれ、家の中にも何もない。借金を返すために最低限の生活を続け、食事も茹でたカボチャと白菜だけの生活を送っている。また借りた労働力を返すのも忙しく、体力的、精神的に大変疲れている。

我々が泊まった、現村長の家も、建築までに7年を要しているが、中へ入ると全く何の飾りもない殺風景な家である。彼の場合も、石工で稼いだ金で、家を建てたが、やはり、そのしんどさは並大抵のものではないようであり、かつ、借金と労働力の返済とで、大変しんどそうである。空気のおいしさと高密度地帯からの脱出によって、住環境としてはいいが、それ以外の負担が大きすぎるのが、他の人々に洞から出ることをためらわせる大きな要因である。

洞とその周りには、現在、現金収入の道を求めて、タバコの栽培を始め、その乾燥庫を作る動きがある。その土台の石は、周りにいくらかもあるが、全て、家族労働で大きな石を切り出し、礎石を作り、その上に版築で土壁を作っている。我々から見ると、それだけでもしんどそうだが、ここの人は、これくらいは楽なものだという。とにかく、桁違いにしんどい仕事を積み重ねてきたのがここの生活であり、この積み重ねの上に、ようやく毎日の生活を成り立たせているのが現状である。したがって、生活の余裕がないため、ちょっとでも他の要素が入ってくると、更に生活は苦しくなっていくという。極めて微妙なバランスの上に成り立っているのがここの生活といえるだろう。

しかし、それでも、かつての2軒から、今は7軒にまで、外の家は増えている。これからも、中からはみ出すような形で、少しずつ状況は変わっていくのであろう。

しかし、少し目を広げて、外へ出た人が更に別のよりよい土地を求める可能性はどうだろうか。

町から洞までの往復の間に見た限りでは、洞の周辺環境が最も悪くなっている。したがって、彼らの薪採取や畑作りは、洞から1時間もかかる遠隔地へ延びてきている。しかし、無論これにも限度があり、かつ、中国はどこにも既に人がいる。義理の関係や、人を頼って行くに

は限界があるのは目に見えているのである。

これから先、どのような生き方を求めればいいのか。政府は、このような極貧地帯を五万と抱えているため、簡単に援助をしてはくれない。村民自身が、工夫して生きて行くしか道は残されていない。

今考えられる唯一の道は、やはり出稼ぎしかない。最低の生活源はここにおいて、あとは出来るだけ、この場を離れる人数を多くして、環境への負担を減らし、出ている間に、現金収入を得るというのが最良の策である。

観光をいう人もあるが、洞穴は決してきれいなものでもないし、殆どの人は、泊まりもせずに帰っていく現状では、一般のツーリストを期待することはまず無理であろう。

水が乏しくなり、薪や材をとる森がなくなり、人口が増えて食料が不足し、それを作る土地も極めて狭いという最悪の状況は、しかし、中国の各地で見られる状況でもある。むしろ、全ての条件が揃った土地という方が珍しい。そういう中でこちらの人々は、まさしく血のにじむような努力を重ねて来たのである。

私はこの勤勉さこそが、この洞の将来を救うものだという気がする。外から来た人間の浮ついた進言は無用である。彼らは外から来た人を歓待してくれるが、しかし、外からの助力というものは、短期的なものであり、長い目で見ると、決していいものとはいえない。むしろ、現場に住んでいるものが考えに考えた末に出てくる方向が一番正しいのである。

その歩みは遅々としているかもしれない。しかし、地元にいる人間が、これしかないと思ったことが、最も確かである。外の人間が参考意見をいうのは構わないが、それで拘束してはいけないのである。

洞窟を離れて、再び、気持ちの良い石灰岩の岩の間を帰路についた時、ホッとした。こういう所に暮らしていないでよかった、というのが正直な気持ちである。そして、改めて、見てきた人々の生き方に感動した。

別に、この地域に限ったことではないが、中国を訪れて、最も心うたれるのは、地に足のついた人々の生活である。山の上から低地の水田に至るまで、人々は、しっかりと地に足をつけ、台地からの恵みを受け取っている。寸地寸金、一木一草に至るまで、殆ど捨てたりすることなく、全生活に生かしている。

その最も極端な例が、ここにあげた峰岩洞の例であろう。

ここでの生活は厳しいものはあるが、どこかで、生活というのは、これが本当だという気がして、ここを後にしたのである。